

『日本アジア研究』第13号(2016年3月)

日本におけるベトナム反戦運動史の一研究 ——福岡・十の日デモの時代 (3)——

市橋秀夫*

日本各地域に存在したベトナム戦争反対運動のなかでも、息の長い運動を続けたのが福岡市におけるベトナム反戦市民運動(「福岡ベ平連」)であった。その活動の前身となったのが「十の日デモ」と呼ばれた定例デモで、1965年から1973年までの間のおよそ7年半、ほぼ休みなく月3回、市民によって続けられた。本論考は3部構成の第3部に当たり、「福岡ベ平連」が発足する前の1965年4月から1967年末までのおよそ3年間を「十の日デモの時代」と名付けて検討対象とし、福岡におけるベトナム反戦市民運動の発足の経緯と運動の展開過程を明らかにするものである。

本誌11号および12号掲載の第1部、第2部の論考で明らかにしたように、福岡における十の日デモは九州大学の数学者たちが重要な担い手となって発足したものであった。しかし、1966年6月からは、福岡以外の日本諸地域におけるベトナム反戦市民運動との連携が東京のベ平連を媒介にして始まっている。本稿では、福岡における十の日デモが、そうした全国的なベトナム反戦のための連携ネットワーク形成にどのような経緯で接続、参与していったのかという点をまず検討する。

ほぼ同じころ、十の日デモの参加者にも変化が見られるようになる。労働組合に組織された若い世代の労働者たちがデモに参加するようになった。また、九州大学の学生たちの参加も、医学部の学生たちが独自の反戦グループを作って主体的に参加するようになる。また、個人として十の日デモに主体的に参加するようになった九州大学の学生についても、3事例で具体的に検討していく。さらには、九州大学以外の学生の参加も次第にみられるようになる。その事例についても紹介する。

1965年2月のベトナム北爆から68年1月の佐世保闘争までの約3年のあいだ、九大学生が大衆的な規模で最もこだわった問題は、ベトナム反戦でも日韓条約闘争でもなく、67年初夏の教養部田島寮の寮祭の樽神輿コースおよび九大学生祭の仮装行列コースの変更問題をめぐるものだった。このいわば「フェスティバル」の自治と自由に対する警察の介入に対してみせた九大学生たちの行動には、その後の大学闘争やベトナム反戦運動を予見させるものがあった。その点をみていく。

最後に、十の日デモに対する当時の福岡市民の評価と態度を確認しつつ、さまざまな批判に応えつつ、デモ参加者たちがどのように自らのデモを位置づけていたのかを確認してみたい。

キーワード: 反戦運動, ベトナム戦争, 福岡市

目次

0. はじめに
1. ベトナム侵略戦争に抗議する九大研究者たち 1965年4月

* いちはし・ひでお, 埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授, 歴史学

- 1-1. 九大教授団, 安保以来の抗議声明とデモ
- 1-2. 青山道夫
- 1-3. 具島兼三郎
- 1-4. 都留大治郎
- 1-5. 福岡安保問題懇話会
- 2. 全国各地でみられたベトナム侵略戦争反対の意思表示 1965年2月～1966年6月
 - 2-1. 全国各地で知識人たちが抗議声明
 - 2-2. 市民の自発的なベトナム反戦行動
 - 2-3. 政党や労働組合など既存組織によるベトナム反戦運動と日韓条約反対運動
 - 2-4. マス・メディアによって喚起された市民によるベトナム侵略反対
 - 2-5. ベトナム侵略反対と日韓条約反対——日韓条約反対運動の難しさ
 - 2-6. 自発性と個人性を求める流れ——ベ平連と反戦青年委員会
 - 2-7. 労働運動における反戦ストライキの困難
- 3. 小括
(以上, 本誌11号に掲載)

- 4. 承前(1)
- 5. 福岡での既存組織によるベトナム反戦運動 1960年代初頭～1967年12月
 - 5-1. 福岡での反米軍基地運動
 - 5-2. 米国のアジア反共産主義軍事戦略と九州北部
 - 5-3. 改憲・核武装阻止福岡県会議
 - 5-4. 小林栄三郎
 - 5-5. 福岡県下米軍基地を通したベトナム戦争への加担への抗議
 - 5-6. 福岡県反戦青年委員会の結成
 - 5-7. 田川地区反戦青年委員会
 - 5-8. 日韓条約闘争後の福岡でのベトナム反戦運動
- 6. 数学者のベトナム反戦活動とその背景——若手数学者たちの戦後経験
 - 6-1. カリフォルニア大学「ベトナムの日委員会」に署名電報
 - 6-2. ベトナム数懇の発足
 - 6-3. 若き数学者たちの運動——東大SSS
 - 6-4. 九大数学教室の戦後
- 7. 九大十の日デモの会の発足 1965年10月～
 - 7-1. 直接のきっかけ
 - 7-2. 社会党を良くする会
 - 7-3. 渡辺毅, 倉田令二郎
 - 7-4. 倉田ヒデ子
 - 7-5. 山田俊雄
 - 7-6. 金原ヒューマニズム
 - 7-7. 十の日デモの由来
 - 7-8. 東京ベ平連との関わり——意識していたが無関係
 - 7-9. 十の日デモは誰が参加して始まり, どのように行なわれていたか
 - 7-10. 十の日デモの特色
- 8. 小括(2)
(以上, 本誌12号に掲載)

- 9. 承前(2)
- 10. 東京ベ平連との連携 1966年6月～
 - 10-1. 福岡での全国縦断日米反戦講演会
 - 10-2. 山田俊雄の日米市民会議(東京)への参加
- 11. 労働者と学生の参加
 - 11-1. 九大医学部生による「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」
 - 11-2. 個人として参加した学生たち
 - 11-3. 東京ベ平連と連携した講演会を継続開催
 - 11-4. 九大以外の学生の参加
 - 11-5. 既存組織の行なうベトナム反戦運動との違い

12. 安保以来最大の九大生デモ——樽神輿と仮装行列
13. 十の日デモの広がりとその評価
 - 13-1. 福岡市民の十の日デモ評価
 - 13-2. 組織による運動と市民個人による運動
14. まとめにかえて

9. 承前(2)

1965年2月のアメリカ合衆国による北爆以降、ベトナム戦争の激化に対して日本各地で顕在化した市民によるベトナム反戦運動は、1966年の夏になると、東京の「ベ平連」の働き掛けを契機にして全国的な連携関係を形成し始める。本誌11号および12号掲載の拙稿で明らかにしてきたように、福岡における十の日デモは九州大学の数学者たちが重要な担い手となって発足したものであった。そして、その活動は全国的かつ国際的な数学者のネットワークの中で得られた情報や交流のなかで取り組まれたものであった。しかし、数学者の学術的ネットワークを越えた全国的な連携は未形成であり、福岡の十の日デモも、市民に広く開かれたデモではあったものの参加者は九州大学の教員と学生に限られ、福岡市というローカルな地域空間の中で展開されていたといえる。しかし、1966年6月からは、福岡以外の日本諸地域におけるベトナム反戦市民運動との連携が、東京のベ平連を媒介にして始まる。本稿では、福岡における十の日デモが、そうした全国的なベトナム反戦のための連携ネットワーク形成にどのような経緯で接続、参与していったのかという点をまず検討する。

ほぼ同じころ、十の日デモの参加者にも変化が見られるようになる。労働組合に組織された若い世代の労働者たちがデモに参加するようになった。また、九州大学の学生たちの参加も、数学関係や社会科学関係だけでなく、医学部の学生たちが独自の反戦グループを作って主体的に参加するようになる。それら新たな参加主体について検討する。

あわせて、個人として十の日デモに主体的に参加するようになった九州大学の学生についても、具体的に検討していく。取り上げる3事例とも、十の日デモや68年5月に結成される「福岡ベ平連」の中心的担い手となっていく学生、院生である。さらには、九州大学以外の学生の参加も次第にみられるようになってくる。その事例についても紹介する。

1968年にいたるまでの九大では、既存学生団体によるベトナム反戦運動の取り組みには目立ったものがなかったと言える。1965年2月のベトナム北爆から68年1月の佐世保闘争までの約3年のあいだ、九大学生が大衆的な規模で最もこだわった問題は、ベトナム反戦でも日韓条約闘争でもなく、67年初夏の教養部田島寮の寮祭の樽神輿コースおよび九大学生祭の仮装行列コースの変更問題をめぐったものだった。2,000人にもよる学生たちがデモや座り込みの抗議行動を行なって警察権力と対峙したのである。このいわば「フェスティバル」の自治と自由に対する警察の介入に対してみせた九大学生たちの行動には、その後の大学闘争やベトナム反戦運動を彷彿とさせるものがあった。その点をみていく。

最後に、十の日デモに対する当時の福岡市民の評価と態度を確認しつつ、さまざまな批判に応えつつ、デモ参加者たちがどのように自らのデモを位置づけていたのかを確認してみたい。

10. 東京ベ平連との連携 1966年6月～

10-1. 福岡での全国縦断日米反戦講演会

21回目の十の日デモの翌日、十の日デモの会としては初めてとなる大規模な反戦市民講演会が福岡で開かれた。東京のベ平連が企画して6月2日～14日に実施した第1回「全国縦断日米反戦講演」旅行の実施先の一つが福岡であり、その講演集会であった。しかし、それは東京のベ平連から直接連絡があって実現した企画ではなかった。福岡の文化人団体である安保問題懇話会に、京都大学の教授で人文科学研究所の所長を務めていた桑原武夫から電話が入ったのである。そして、安保問題懇話会の代表世話人であった青山道夫九大教授が経済学部の都留大治郎に話をし、十の日デモの会のメンバーが受け入れ準備をすることになったと思われる¹。

フランス文学者であった桑原武夫のベトナム戦争反対のスタンスもおもしろい。桑原は1904年生まれで当時すでに還暦を超えていた。その桑原が、心理的に正直にいうと、自分が米国のベトナム侵略に反対して立腹するのは歴史的経緯を考えたりした上でのものではないと告白している。「私はむしろ、いきなり北爆に反対し、その中止を求めたい」といい、米国の対ベトナム方針は「何よりもまず美的に耐えられないのである」というのである。そして次のように述べている。

国際政治の問題において感情に走られては困る、というかも知れない。しかし、美的判断はある瞬間、倫理的判断、合理的判断と一致しうる。全身的判断とはそういうことである。赤ん坊の手を振りあげようとする壮漢を見て、憤慨し、非力ながら止めに入らねばと思うものにたいして、したり顔に、甘い感情にかられてはいけません、あの赤ん坊は暴力団××組の親分の甥ですよ、あんたは暴力団を認めるのですか、などといったも効き目はない。たとえ相手が組員でも、家宅侵入と暴力はよくないのである²。

暴力団は共産主義、その親分は中国ないしはソ連、赤ん坊はベトナム解放戦線、組員はベトコンないしは北ベトナム、壮漢は米国ということなのだろう。桑原のような戦前リベラリストの「古い平和運動家」世代が、戦後民主主義的な理念からではなく、戦後育ちの若い世代のものとされるような身体感覚的な嫌悪から反対しているのである。ベ平連との関係で補足しておく、桑原は、ベ平連の運動として有名な米紙『ニューヨーク・タイムズ』への反戦広告掲載の呼びかけ人の一人でもあった。

福岡講演のための準備期間はかなり短かった。実際の受け入れの責任者であったと思われる九大教授都留大治郎が講演会直前、1966年6月6日付で東京ベ平連の「鶴見[俊輔]」宛に出した手紙には次のように書かれていた。

¹ 座談会「青山先生の社会活動について」大原長和・黒木三郎『追想の青山道夫—民主主義と家族法』（法律文化社、1979年）、229頁；小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、69頁。

² 桑原武夫「ベトナムについての感想」『展望』1965年6月号、7頁。

先日は、お忙しいところ、電話で失礼申しました。青山[道夫]先生からの連絡が少しおくれましたので、なんのことも、最初、よく計画の意義が掴めず、大変でおくれて、準備不足で、どうも申しわけありません。一昨日、帰福して、昨日、準備委員会をひらいて、大体のこともとりきめました³。

そもそも東京での受け入れ準備自身が慌ただしいものだった。小田実の強引だが否とは言わせない、魅力的ある独特な物腰の物事の進め方について『アサヒグラフ』は当時次のように伝えている。

四月に突如帰国して、ベ平連でアメリカの反戦活動家を呼んで日本縦断講演会をやろうと彼が言い出した時、事務局では、誰も本気にしなかった。ところがすでに彼が約束済みの人物が来るという電報を打ってきたからサア大変だ。

あとはもう小田式ブルドーザーを転がすようなものだ。見ず知らずの人でも、あの人なつこい笑顔で、『あなたひとつ頼みますわ』と、厚かましいほどのくつたくなさでやられると、つい講演の一つくらい受持たなくては、という気になるらしい。北海道から沖縄まで六月の半月間に二十三ヵ所で、合計一万五千人の聴衆を集めて、講演会は大成功だったという⁴。

福岡での講演は6月11日(土)九大大講義室で開かれ、ハワード・ジンHoward Zinn(ボストン大学教授・政治学、1925-2010)とラルフ・フェザーストーンRalph Featherstone(学生非暴力調整委員会Student Non-violent Coordinating Committee: SNCC常任委員、1939-70)が行ない、日本側の問題提起者は白井正(西南大学教授)、原島重義(九大教授)、青山道夫(西南大学教授)、倉田齡二郎[令二郎](九大教授)であった。ジンとフェザーストーンは合衆国の公民権運動や、ベトナム戦争と想像力、教育の問題について講演した⁵。白井は佐世保の米軍軍事基地の歴史と現状について、原島が福岡の板付米軍基地内の民有地返還訴訟の最高裁判決の持つ意味について、倉田が福岡での十の日デモが始まるに至った経緯とその役割について講演した⁶。司会は都留大治郎が務めた。参加者は600名、法学部の部屋での「懇談会その一」に参加した者60名、ホテルでの「懇談会その二」に参加した者30名であった。

主催は九州講演実行委員会とされていたが、準備を主として担ったのは十の日デモの会メンバーであった⁷。また、東京のベ平連からは鶴見俊輔や開高健が出席

³ 都留大治郎から鶴見[俊輔]宛の手紙(1966年6月6日付、ベ平連受信文書、吉川勇一史料)。

⁴ 『アサヒグラフ』(1966年8月12日号)、12頁。

⁵ 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、69頁。

⁶ この講演会の記録が採録された鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』(河出書房、1967年)には、青山教授の発言が掲載されていない。青山は集会では代表として挨拶をすることが多かったので、このときも短い挨拶をただけであったかもしれない。

⁷ 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、69頁。

していた⁸。以後、東京ベ平連が74年1月に解散集会を開くまでの7年半のあいだ、福岡の反戦市民運動は東京ベ平連と連携を取り続けていくことになる。

結果的に、このベ平連講演会は、安保問題懇話会と十の日デモの会との合同企画のようなかたちになったといえるが、福岡におけるこの最初のベ平連イベントが、ベ平連のメンバーではない京都の桑原武夫(1904-88)からの連絡で始まったこと、新しくできた若い世代中心の十の日デモの会にではなく、60年安保のときから活動が続けてきていた安保問題懇話会の青山道夫への連絡で始まったという点は重要である。東京で発足したベ平連と福岡での十の日デモの会とは、もともとは直接の接点はまったくなかった。戦前リベラリスト世代のネットワークを介して、福岡と東京のベトナム反戦運動はつながりを持ち始めたのである。

10-2. 山田俊雄の日米市民会議への参加

8月11日～15日には、東京で開かれた「ベトナムに平和を！日米市民会議」に十の日デモの会の中心メンバーの一人であった山田俊雄が参加して定期デモの実践を呼びかけた。山田は、65年10月に発足したベトナム反戦数学者組織「ベト数懇」（ベトナム問題に関する数学者懇談会）の中心メンバーにして東京ベ平連とも関係の深かった福富節男に言われて出席したという⁹。ここでも注目しておきたいのは、山田が東京のベ平連から直接に声をかけられたわけではなく、福富との数学者同士のネットワークを通じて参加することになった点である。イベントの発案は東京のベ平連だったが、それはベトナム問題に関心を寄せるようになっていた多くの既存サブ・ネットワークを介してはじめて共有されていくことになったのである。

日本側61名、合衆国から9名、外国人オブザーバー15人、ほか傍聴者多数で会議は開かれた。最終日の14日にはサンケイ大ホールで1,600人を集めた市民会議大衆集会がもたれ、日米反戦市民条約が調印されている。山田は全体討議において次のように発言し、十の日デモの意義をアピールした。

日本では、定期的デモは、私の知っているかぎり二つ行なわれています。ひとつはベ平連が東京で、毎月第四土曜日に行なっています。もうひとつは、東京から西に千キロ行った福岡市で毎月十日、二十日、三十日に行なわれているデモです。…定期的デモこそ、私たち市民は、けっしてアメリカ政府および日本政府の活動にならされないという、意思表示を行なうひとつの方法だと思います¹⁰。

これに対しては鶴見俊輔が、定期的デモは東京と福岡だけではなくもっと広く行なわれているとし、自分の知っている事例として「京都でずっと、今年の十月以来今日まで続いて行なわれています」¹¹と応じた。福岡は、東京、京都と並んで、定期的デモのパイオニア的存在であった。

⁸ 鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』（河出書房、1967年）、205頁。

⁹ 山田俊雄オーラル・ヒストリー、2008年2月27日。

¹⁰ 『文芸』第5巻10号（1966年10月号）、258頁。

¹¹ 同上。

11. 労働者と学生の参加

こうした東京のベ平連との協力・連携の始まりと並んで、66年夏ごろまでにもうひとつ変わり始めたことがあった。デモの参加者の構成である。当初は大学関係者——教員と大学院生——だけのデモだったが、やがて若い労働者の参加が見られるようになったという。小野山卓爾は、デモ参加者である研究者が、チューターをしている労働者サークルの人びとに話しかけた結果であろうと考えていた¹²。これは、社会主義協会系の九大教員のことをさしているのだろう。

労働者の十の日デモへの参加ということではっきりしていることは、66年6月30日の定例デモに、全電通福岡支部が参加したということである¹³。5月29日のハノイおよびハイフォンへの爆撃を受け、支部として行なった行動だった。何人参加したのかなど詳細は分かっていないまだだが、組織労働者が参加しはじめたということは、福岡の十の日デモにとってはひとつの展開であった。小野山卓爾は、『『10の日デモ』はこのころから、参加者に若い労働者をコンスタントに迎えるようになった』と書いている¹⁴。

11-1. 医学部生による「ベトナム戦争反対に起ち上がる会」

若い労働者に加えて、学生たちも参加し始めた。最初に存在感を示した学生たちは、「ベトナム戦争反対に起ち上がる会」という九大の医学部学生グループだった。山田俊雄は、総合雑誌『文藝』（66年10月号）に掲載された「ベトナムに平和を！日米市民会議」の記録を見た医学部学生数名が訪ねてきた記憶があり、それがきっかけで「ベトナム戦争反対に起ち上がる会」のメンバーたちのデモ参加が始まったかもしれないという。山田の記憶が間違っていなければ、彼らの十の日デモ参加は66年秋以降に始まったことになる。

しかし、「ベトナム戦争反対に起ち上がる会」の中心メンバーの一人であった医学部生兼崎暉（62年入学）によれば、兼崎自身は十の日デモ発足時からすでにデモには参加していたという。兼崎は教養部時代、社青同が握っていた自治会活動に携わり、社青同の活動家としてもしばらく活動したが、組織的運動の難しさにつづかることになったという。その結果、2年間の教養課程を終えて箱崎キャンパスの専門課程に移った64年からは、運動からは距離を置き、医学の専門的勉強に打ち込むようになっていた¹⁵。その兼崎が再びベトナム反戦という運動に参加するようになったのはなぜか。兼崎はその経緯を次のように書いている。

大学に入って、1960年代はまだ学生運動のはなやかりし時代でしたから、僕も学生自治会に飛び込み、いわゆる活動家になったのですが、当時は政治運動は大衆的にやっこそ意味あるものと思っていました。だから、例えば、一人でハンガーストなどで訴える等はナンセンス、運動は組織的、集団的でなくちゃ

¹² 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、69頁。

¹³ 西本僊（全電通福岡支部）「職場に根づいた反戦思想」『社会問題月報』vol. 6, no. 1, 1967年、30頁。

¹⁴ 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、69頁。

¹⁵ 兼崎暉オーラル・ヒストリー、2012年2月15日。当時九大の教養課程は医学部は2年間、その他の学部は1年半だった。

あと思っていたのですが、だんだんと現実の組織的運動の困難と自分自身へのプレッシャーに打ちひしがれていた時、ふと、『チボー家の人々』を読んでみたらと言った高校時代の化学の先生の話を読みだして、落ち込んでいる中で読んでいく中から、政治運動も自分自身の生き方の問題であり、他人を運動に動員できるかなどという問題など第一の問題ではないと感じはじめ、折しも、ベトナム反戦運動ではベ平連の市民一人ひとりの自発的参加に基づく運動も起こり始め、それから以後、自分自身の生き方の問題として、僕は政治・社会の運動に取り組むというスタイルに転換したのです¹⁶。

兼崎はもう少し具体的にこの間の経緯を記憶している。兼崎によれば、専門課程のある箱崎キャンパスに移ったのち、教養部時代にともに自治会活動を担った同級の医学部生秋根康之から、工学部応用理学教室の倉田令二郎らのことを聞き、倉田らが開いていた「技術論研究会」に参加するようになった。そこから、個人として最初の十の日デモにも参加することになる。つまり、「一人ひとりの自発的参加に基づく運動」に取り組むようになる¹⁷。倉田令二郎や山田俊雄といった応用理学部の数学者たちと交流し議論を交わしていく中で、個人主体のベトナム反戦運動というスタイルを見出していったのである。

ただし、兼崎と秋根は、十の日デモに個人で参加するだけでは物足らなさを感じていた。そこで彼らは、個人参加を原理としながらも運動を積極的に担う運動体をつくっていくことになる。それが「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」であった。彼らの書いた「ベトナム戦争反対への僕等の試み」と題された「随想」が、九大医学部の同窓会誌『九大医報』の36巻4号に発表されたのは1966年10月のことであった。兼崎自身は、会はそのかなり前にすでに発足していたはずだと記憶している¹⁸。

この随想は「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」準備会の名前で出されているが、個人主体の運動にふさわしく、文章は兼崎と秋根がそれぞれ別個に書き、それぞれの部分に文責があるのかも明示されている。こうしてみると、兼崎らは、66年夏までには、個人を主体にしながらも一定の組織性のある運動、すなわちベ平連的なベトナム反戦運動を学生主体で作ろうと動き出していたということになるのだろう。この会には、医学部生十数名の参加があったという¹⁹。

「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」は医学部キャンパスを中心に作られ、二つの原則をもっていた。「①アメリカのベトナム侵略に反対し、日本政府のアメリカへの加担に反対する。②、①の目的を追求するために自らが積極的に、その意図を何らかの具体的な行動でもって表現する」²⁰である。会の運営はいわゆるベ平連方式で、上

¹⁶ 兼崎暉「学校と先生たちの思い出」『ういニュース』93号（2010年12月、http://ww2.tiki.ne.jp/~ui-maki/news_tp/04tayori/ui_93.html; 2012年2月29日アクセス）。

『ういニュース』は、北九州市で初めての学校労働者の独立組合「北九州がっこうユニオン・うい」が発行。兼崎は、「日の丸・君が代」の強制と闘っている地元北九州市の教員たちを少しでも支えられればという思いでこの文章を書いたという。

¹⁷ 兼崎暉オーラル・ヒストリー、2012年2月15日。

¹⁸ 『九大医報』36巻4号、1966年、30-33頁。兼崎暉オーラル・ヒストリー、2012年2月15日。

¹⁹ 同上。

²⁰ 「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」準備会「ベトナム戦争反対への試み」『九大医報』vol. 36, no. 4, 1966年、31頁。この文章は、ともに医学部3年生であった兼崎暉と

記の2点に賛同できる「各個人が集って、各個人の適当と考える具体的方法で自分のベトナム侵略戦争反対の主張を表現していく」。運動の出発点は「各個人がなぜベトナム戦争に反対して行動するのかを自分自身に問いかけること」であり、運動に必要な費用も参加する個人が分担して負担する。そして、以下の6つの具体的計画を掲げた。

- ①ベトナム戦争反対をテーマとする講演会、討論会を行う。
- ②ベトナム戦争反対を訴える写真展や映画会を行う。
- ③昨年より九大本学の大学院生、教員を中心としてベトナム戦争反対のデモが『十の日デモ』として、毎月十、二十、三十日に午後五時から六時頃まで行われていますが、このデモに参加する。
- ④僕等の主張をパンフレット、ビラにして配布し、クラスや友人達と話合う。
- ⑤各個人のベトナム戦争反対の意見を毎週1回、生協食堂前に掲示する。
- ⑥講演会、討論会、パンフレットを通じカンパ活動を行い、ベトナム戦争反対の資金とする²¹。

「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」はこの具体的計画の③に則って十の日デモに参加していたのである。

兼崎暉は、ベトナム戦争と自分の生活との関わりについてどう考えるようになったのかについても記している。当初は「プロ野球の勝敗ほどにも注意をひかなかったし、遠い世界のでき事のように思っていた」ベトナム戦争だったが、「ナパーム弾に焼かれた田畑、逃げまどう避難民の報道、米軍の使用する毒ガスを始めとする化学兵器による大量の殺人、北ベトナム爆撃などますます重苦しさを増す状況は僕をしだいに不安にかりたてていった」。この不安は、大量殺戮など多くの人びとが毎日生命を脅かされているという「非人間的状況」と、『日米安全保障条約の下で中立はありえない』と声明する日本政府が医療団派遣、物資の援助、原子力潜水艦の寄港承認などによって積極的にアメリカのベトナム戦争へ加担している状況²²によってもたらされている。にもかかわらず、「このような状況において、僕は何らかのベトナム戦争についての意見を持ちながらも、日常の生活の渦の中で、いつのまにか自分を主張しえなくなってしまう、ベトナムでの非人間的状況の黙認者になり、日本政府のアメリカへの加担を黙認することによって、自分も侵略戦争への共犯者に甘んじている」。兼崎は、「このような自分の生活態度を拒否し、ベトナム戦争反対の行動を起こすことを思い立ち、同じように考える友達と討論した結果」、「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」をつくることにしたのだと書いている²²。

兼崎暉と共に「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」を立ち上げた秋根康之は、会の二つの原則について、より具体的に踏み込んで語っている。「ベトナム戦争反対」

秋根康之によって分担執筆されているが、この段落の引用部分の文責はすべて兼崎である。

²¹ 「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」準備会「ベトナム戦争反対への試み」『九大医報』vol. 36, no. 4, 1966年, 31頁。文責・兼崎暉。

²² この段落の引用部分はすべて「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」準備会「ベトナム戦争反対への試み」『九大医報』vol. 36, no. 4, 1966年, 30-31頁からで、文責は兼崎暉。

のスローガンに反対する人はいないのであって、日本政府でさえ平和を主張している。そのため「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」は「ベトナム戦争反対」ではなく、「アメリカのベトナム侵略に反対し、日本政府のアメリカへの加担に反対する」のである。では、どのようにここ日本で、具体的に日本政府のアメリカへの加担に反対するのか。秋根が提案するのは基地反対闘争である。

『アメリカのベトナム侵略反対』のデモをするのも、あるいは、救援物資を送るのも、確かに一つの連帯の一つの形です。しかし、ここ日本で『アメリカの侵略反対』と叫ぶことは、負け犬の遠吠えの感をまねがれません。私たちは、私たちの叫が、私たちの行動が、現実の力として、社会に政治に登場できることを——それが非常に困難なことを知っていながら——望んでいるのです。『アメリカの侵略反対』は軍事基地として使われている日本の社会の現実への批判として、具体化されねばなりません²³。

秋根は、1965年まで九大教養部自治会を握っていた社青同九大学生班のリーダー格であり、同時期に九州学連の委員長も務めていた著名な学生生活家だった²⁴。兼崎が社青同に所属することになったのも、秋根の誘いがあったとのことだったという。

基地反対闘争こそ日本人が取り組むべきベトナム反戦運動のかたちであるという秋根の議論は、1968年以降ベトナム反戦活動を積極的に展開した反戦青年委員会、とりわけ北九州の反戦委員会の運動の方向と大きく重なるものである。また、秋根の運動提案は合衆国カリフォルニア大学バークレー校の「ベトナムの日委員会」の運動提案にも類似しているが、それは倉田令二郎ら九大数学者たちからの情報と影響があったのことだったかもしれない。倉田は、こうした医学部生たちの活動を大きく評価していた²⁵。

いずれにしても、これは、まぎれもない十の日デモ批判でもある。「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」による、デモでは何も変わりはないのではないかという問いは、おそらくベトナム戦争に反対した学生の多くが抱いた疑問であっただろう。ベトナム人民への連帯を心から希望し、その希望を実現する方法としてデモは適切なものだろうか。「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」は、十の日デモに参加しその意義を一応は承認しながらも、なおその限界について問わざるをえなかったし、またそう問うことをためらわなかった。

²³ 「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」準備会「ベトナム戦争反対への試み」『九大医報』vol. 36, no. 4 (1966), 32 頁。この部分の文責は秋根康之。

²⁴ 1965 年までは教養部自治会は社青同が握っていたが、その後民青にとってかわられている。九州大学さようなら六本松誌編集委員会編『青春群像 さようなら六本松』花書院、2009 年、238 頁参照。付言すれば、1965 年に民青にとってかわられるまでは、社青同が九大教養部自治会を指導していたのであり、その後九大における社青同の学生班は旧来の社会主義協会系ではなく、解放派が握っていくことになるとはいえ、社青同の九大における存在感は大きなものがあつた。また、『民主主義の旗』15 号、1964 年 6 月 15 日 (<http://www.assert.jp/data/history/mgdata/minki/15/mk15g.jpg> : 2012 年 2 月 29 日アクセス) には、九州学連委員長である「秋根君」の関西学連再建に関する談話が掲載されている。

²⁵ 兼崎暉オール・ヒストリー、2012 年 2 月 15 日。

九大工学部で十の日デモを中心的に担っていた数学者小野山卓爾、山田俊雄、倉田令二郎は、この問いを真剣に受け止めていた。彼らは『十の日デモ』にも、デモを手続きと操作と儀式にしようとする傾向が、常に存在することまで、私たちは否定する勇気をもたない」と書き、「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」の学生たちには「世界を一举に理解し、いっさいの疎外からの自由をかちとろうとする焦りがまみられるとしても、『十の日デモ』のモラルを深く支えているといつてよいであろう」という言い方で、デモという行動の論理的・倫理的限界を自覚していた。『十の日デモ』の意識は、いまだ十分に討議されず、十分に形成されていないのが現状であった²⁶。

11-2. 個人として参加した学生たち

興味深いことに、十の日デモを始めるにあたっては、学生に呼びかけるのか否かについて教官の中で議論があったという。学部生が大挙してデモに押しかけてきてジグザグなどされては収拾がつかなくなるなどの意見が九大教官の間で出たという。そして、

最初は、教官と大学院生を主体にやれるところまでやってみようということではじめ、そのうちもう大丈夫というところで、学生に参加を呼びかけた。それも、教官が校門の前でビラを学生にまいて呼びかけるという御熱心さでやったのだが、何百、何千どころか、ほとんど誰も参加などしはしない。運動のはじめには余計なことばかり気になるものである。²⁷

わずかに存在した学生の参加は、明確な運動意識を持った医学生によるものばかりではなかった。まったくの一人で、組織や運動とは一切関係なく参加してきた学生もいた。最も早くから十の日デモに参加していた平嶋康昌はその一人で、65年入学の理学部数学科の学生だった。1947年2月生まれの平嶋は、60年安保の影響があったのか中学時代に天皇のお召列車歓迎を準備していた学校を批判したり、近所に住む九大の医学生が全学連で活動しているのを聞いたりする中で、自分も大学生になったらデモに出るんだという気持ちを抱いたという。九大に入学した平嶋は最初から、学生のデモがあると、まったくの個人として誰ともつるむこともなく一人で参加していた。

1965年、安保の谷間、民青が社青同に換って教養部自治会をにぎった九大に、数学科の学生として入学した私は、大半が民青、後ろに革マルという奇妙なデモに参加していた。前と後ろではシュプレヒコールも歌も違っていたが、深く考えもせず、その間あたりを歩いていた。その頃、九大の数学者達が毎月10日、20日、30日に「ベトナム反戦十の日デモ」というのをやっていると、担任の瀬口常民さん(あいつの部屋には出入りするなど民青から言われていた)から聞いた。「十の日デモ」は参加者が10人を切ることさえあるなかで、山田俊雄さ

²⁶ 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、70頁。この論考の後書に「以上は、九大工学部数学教官倉田令二郎、山田俊雄両氏との討論の結果書かれたものである」(71頁)とある。

²⁷ 小野山卓爾『『十の日デモ』の意識』『現代の眼』1967年3月号、70頁。

んを中心に気負いもなく淡々と行なわれていた。こういうのもデモなのだと心ひかれ、毎回参加することになっていった。²⁸

平嶋が最初に十の日デモに参加したときもやはり一人でデモのある日に出かけて行って、「一緒にデモしてよろしいですか、って言って入っただけ」だったという²⁹。

平嶋が十の日デモに初めて参加したのは教養部時代後半の66年の前半だったと思われるが、小野山卓爾とは会わずじまい、つまり小野山がすでに津田塾大に転出した後のことだった。平嶋の記憶では、デモの参加者はいつも15人くらいで、10人を切っていたこともある。山田俊雄が必ず旗を持ってやって来る。平嶋は、その後長年にわたって欠かさずデモに参加するようになるが、顔を出し始めた当初、山田以外のデモ参加者でよく覚えているのはやはり数学者だった小倉幸雄ぐらい。学生の参加はほとんどなく、デモ終了後に「月に一回、デモのあと」開かれていたティーチ・インの記憶もない³⁰。しかし、平嶋は、十の日デモに参加し始めてから少しずつ同級生らをデモに誘うようになっていった。

平嶋は参加しなかったというティーチ・インとはどんなものだったのか。学生の参加も増えて「メンドクサイ議論」が活発に交わされていたころの様子を、山田俊雄は次のように半ば戯画化しつつ記録に残している。

「十の日デモ」の初期のころ、デモのあとのティーチ・インで、嶋崎[讓]先生、しばしば司会役をやったが、学生のやるメンドクサイ議論をもジョー先生、適当に言葉を拾いあげて、マツメてしまうので、いらだった小倉[幸雄]先生や、今[1969年末現在]は青医連の秋根[康之]先生は、「嶋崎サンは常に正しい、タダタダ正しい」といって怒った。一方倉田[令二郎]先生は、熱心に学生とつきあい——とくに医学部——今の犬をなすにいたったという次第。タケシさん[渡辺毅]とP[山田俊雄]は議論には一向熱心でなく、Pは会場の準備や時間のみを気にし、タケシさんはタマにシャベルと「デモに出るだけで十分、その上ティーチ・インなどにひっぱり出されて、ヤヤコシイ議論きかされるなんてとんでもない」などといい、学生にオコラれていた³¹。

山田らしい戯作的な物言いだ、ここに出てくる「秋根先生」とは、すでに触れたように、医学部生時代の66年に「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」を立ち上げた中心メンバーの一人である。

1964年に法学部に入学し、のちに福岡県平連の初代事務局長を務めることになる武内俊造も、66年から67年のあいだに十の日デモに参加しはじめた一人である。1946年生まれの武内は福岡県田川の出身で、父親は炭鉱夫だった。高校まで田川

²⁸ 平嶋康昌「倉田さんに『酒を飲むこと』を教えてもらった、という話」、倉田令二郎著作選刊行会編『万人の学問をめざして—倉田令二郎の人と思想』（日本評論社、2006年）、374頁。

²⁹ 平嶋康昌『オーラル・ヒストリー』、2008年3月10日。

³⁰ 「月に一回、デモのあと」は、67年末当時の金原誠の発言からの引用である。『アサヒグラフ』（1967年12月8日号）、66頁。

³¹ 山田俊雄「マル秘 阿P九大闘争記 P通信」no.2、1969年12月5日。

で暮らした。法学部に入ってから、徹底的にバイトする生活が続いた。武内が十の日デモに参加するようになったのは、倉田令二郎との人間関係からだった。

最初は全く参加してなかったんですね。途中からですけど、いつからかが覚えてないんですけど。要はですね、何かのきっかけで倉田令二郎さん、倉田先生、これですね、この倉田先生の教室に出入りするようになったんですね。まあ、そこに山田先生とかもいたんですけど。どういうきっかけかは覚えてないんですね³²。

武内は反権力志向の強い学生ではあったが、社会科学系の学生によくみられた左翼イデオロギーとは無縁な学生だった。それまで学生運動にも社会運動にもとくに関わっていたわけではない。数学教官だった倉田令二郎と山田俊雄、そして大学院生だった平井孝治ら工学部応用理学教室の面々のいわゆる人柄に魅かれて武内は参加していったといっている。武内は実務能力に抜きんでいて、その才能は、68年の福岡ベ平連結成後の機関紙や歌集の制作・発行、大規模集会の運営など、初期のさまざまな福岡ベ平連の活動にいかんなく発揮されていくことになる。

67年に修士大学院生として応用理学教室に入学した平井孝治は、武内とは対照的で、党派には属していなかったものの、いわば筋金入りの学生運動経験を持っていた³³。1942年生に京都で生まれた平井は、小学校時代に京大天皇事件や荒神橋事件を実際に自分の目で目撃した経験を持っている。その後、京大の学生たちが街頭デモをするとそのあとを追っかけるという愉しみを覚えたという。そんな平井が入学したのが、政治運動が盛んなことで全国的にも有名だった鴨沂高校だった³⁴。平井は鴨沂高校で「安保阻止実行委員会」をつくり、全校1,800名のうち1,200名が参加したといわれる安保反対デモを組織した。さらには三井三池闘争にも単独で参加し、現場で逮捕されるという経験も持っている。

高校卒業後はしばらくフリーター生活をしていた平井は、制御回路設計の仕事を経て九州工大に入学、公害問題などに会うなかで科学技術への幻想がなくなり、工学研究科でありながら純粋学問としての数学の勉強ができる九大大学院の応用理学教室に1967年に進学をはたした。応用理学教室が九大のベトナム反戦運動の拠点となっていることは、入ってみるまでまったく知らなかったと平井はいう。当時の様子を平井は次のように記憶している。

……入ってすぐ十の日のデモがあって、あなたも参加されませんかと言われて、その先輩諸氏を見たら、同じ教室に3人おられましたけど、皆さん参加しておられるんだから。僕は純粹の市民デモというのは初めてだったんですよ。ところが、実際には大学人がつくった運動だったんですね。……市民運動である

³² 武内俊造オーラル・ヒストリー、2010年12月6日。

³³ 以下の平井に関わる記述は、平井孝治オーラル・ヒストリー、2011年9月20日に依拠している。

³⁴ 小林哲夫『高校生紛争 1969-1970』（中央公論新社、2012年）の第二章にも、1960年安保までの鴨沂高校の高校生運動に関する記述がある。

けど、内容的にはもう明らかに大学人の運動ですわ。それから、党派的にいうと社会党のシンパでしたね、当時は³⁵。

十の日デモには、学部横断的な参加があり、応用理学教室のほかには経済学部
の学生が比較的好く参加していたという。

……デモのときでも応理からいろんなものを持ち出すという感じでした。行ったとき[＝九大大学院に入ったとき]には、まあ、せいぜい20人ぐらいのデモでしたからね。僕の印象では十数人だったですよ、1回のデモがね。だけど、とにかく十の日には必ずやっていた。これも一つのやり方だなと思いましたね³⁶。

平井は「特段のことがない限り全部参加していた」という。その後平井は、68年1月の佐世保闘争時にデモ隊指揮で名をはせることになり、福岡ベ平連の結成や九大闘争における九大反戦青年委員会の中心メンバーの一人として活動することになっていく。

11-3. 東京ベ平連と連携した講演会を継続して開催

東京ベ平連が提案を持ち込み十の日デモの会のメンバーが主体となって引き受けた福岡での反戦市民集会は、既述した6月の全国縦断講演会のあとにも断続的に開催された。1966年には12月10日に、小田実や武藤一羊といった全国的に知られたベ平連の顔を講師に呼んだ福岡反戦集会「ベトナム反戦運動とは何か」が九大工学部で400人の聴衆とともに開かれている。この集会は、十の日デモの会、ベトナム戦争反対に立ち上がる会、九大雑誌『展望』の三者による共催だった。小田実が1時間ほど講演した後、

教官、学生、労働者、婦人、高校生10人程度でパネルディスカッション。

各groupの“ベトナム反戦”のとりえ方、運動の進め方が報告された。時間が少なく、討論はほとんどおこなわれず、その点、多少残念だった。

5:30より“十の日デモ”第40回を行う。デモの始めに武藤一羊氏のあいさつあり。

約150人で参加。その後小田、武藤氏を囲む座談会を行った。³⁷

翌67年の7月にも、鶴見俊輔と室謙二が講演した「ベトナム戦争反対のために今何ができるか——若い人びとと考える」が開かれ、規模は小さかったが、高校生を含む80人が参加している。これも「ベ平連全国講演シリーズ」で、福岡を皮切りに、北九州、大阪、札幌、旭川、名古屋と廻った。東京のベ平連いう「外部」との交流が断続的だが持続的に持たれるようになっていった。繰り返しになるが、これらはいずれも、福岡がイニシアティブをとって始まったものではなく、東京からの要請を受けて行なわれたものだった。

³⁵ 平井孝治オーラル・ヒストリー、2011年9月20日。

³⁶ 同上。

³⁷ 山田俊雄よりベ平連あての葉書（1966年12月13日消印、ベ平連への手紙、吉川勇一史料）

11-4. 九大以外の学生の参加

以上のような講演会開催などにも取り組んだ成果か、67年には、九大関係者以外にも十の日デモへの参加者がみられるようになっていった。1967年末から68年初頭あたりにはじめて十の日デモに参加したという佐田展子もその一人だった。佐田は当時西南学院大学1年生で、所属するフランス語学科のクラスの友人二人とともに十の日デモに参加した。すでに西南学院大学でも学費値上げ反対の学生運動がおこり、数人が隊列を組みかけ足で学内をアピールする姿を見たが、「あれは全く一緒に交じれんね、という感じ」を持っていたという³⁸。

親など周囲が太平洋戦争時の空襲やもの不足のことを話していたこと、百道小学校から近くの映画館に引率され、『第五福竜丸』(新藤兼人監督、1959年)を鑑賞したこと、母親が購読していた『暮らしの手帖』の戦争関連の記事や、おもな家事を祖母にゆだねて教員をしていた母親の組合活動の話題、本棚にあった何冊かの『青年歌集』³⁹の歌をおそわった経験などが、佐田を十の日デモに駆り立てた背景にあった。

反戦や社会問題について何か表現しなくてはという気持ちでいた佐田は、デモ参加後「一緒に行動して、ああ、やっぱりこういうことをしなきゃね、と思った」ことを覚えている。

以後佐田は、常連として十の日デモに参加するようになり、1968年の福岡ベ平連結成の時期になると、市内西部の早良口から約1時間、市内電車で九大箱崎キャンパスに通い、『福岡ベ平連通信』発行の準備や天神西鉄コンコース東側での座りこみ・フォーク集会、女性による反戦デモなど、さまざまな行動に熱心に加わるようになった。また、好んで読んでいた宮澤賢治の作品の影響もあったのか、親がかりの身であることに嫌気がさし、自分から大学を中退した。

十の日デモについて佐田は、従来、大学の教職員と交際する場もなく、とくに九大の先生たちのデモだという感じは受けなかったが、同学年ぐらいの学生は少なく、「大人」の男性の多いデモだったように記憶している。が、逆にほんの少しの女性参加者はよく覚えており、そんなデモに、高校の同級生で後結婚することになった人とのデートをかねた参加をふくめ「いつもいつも行っていたという感じ」であった。当時の十の日デモについて佐田は「何かここにいと安らげるという感じだったんですかね」とも回顧する。

ともあれ、十の日デモが始まって2年ほどの間に、参加者の枠は拡がり、多様化し、1968年までには発足時の九州大学の教職員および学生という範囲を超えた広がりを獲得するようになっていた。67年6月9日発行の『週刊朝日』は、「教授、学生のほか、主婦、労働者」が十の日デモの「だんまり行進」に参加していると伝えている⁴⁰。67年12月には、「学者、学生から労組員、婦人団体、に受験浪人まで参加していま

³⁸ 佐田展子オーラル・ヒストリー、2011年10月14日。以下のこの節での引用もすべて同じ。

³⁹ 1948年～69年のあいだに全部で10集刊行された日本の歌声運動の媒体。編者は関鑑子、音楽センター発行。

⁴⁰ 「私たちは何ができるか—日本各地に盛りあがる反戦市民運動」『週刊朝日』1967年6月9日号、20頁。

す」とする金原誠の話が『アサヒグラフ』に載り⁴¹、1968年元旦発行日付の『ベ平連ニュース』には、会員なし・動員なしの「福岡・十の日デモの会」を紹介する金原誠・山田俊雄の記事が掲載され、「学者、学生で始めたものですが、今年[1967年]の特色は市民が三分の二を占めるようになったことです」と報告している。このような参加者の多様化の背景には、ベトナム戦争の激化とそれに対する福岡市民の関心の高まりがあったと思われる。もともとは東京のベ平連から持ち込まれた企画だった反戦市民集会が何度か開かれたことも、十の日デモの知名度を広げるのに役に立っただろう。

11-5. 既成組織の行なうベトナム反戦運動との違い

福岡でベトナム反戦市民運動を担っていった九大知識人たちには、既成組織のベトナム反戦運動はどのように映っていたのだろうか。1966年6月、九大の数学者倉田令二郎は次のような発言をしている。

既成の組織、学生の自治会、革新政党、それから労組は、特に労組は、これはおそらくアメリカと非常に違うと思いますが、何をやる時にも必ずベトナム侵略反対のスローガンを掲げています。しかし、恒常的に、コンスタントに世論形成を行なっていく活動形態が、どうもたいへんとりにくい感じがいたします。非常に忙しいせいということもあるでしょう。⁴²

学生運動に対しても、やはり同じころ、福岡では倉田や山田俊雄が次のように評価していた。

学生運動は過去において侵略戦争に対して、常に敏感に情勢を捉え、鋭い行動形態を提起することによって警鐘を乱打する光栄をになってきたのであるが、ここ半年ばかり、福岡ではめざましい活動はみられない。⁴³

そうした状況のなかで倉田は、アメリカの対ベトナム政策やそれに追随する日本の外交政策に圧力をかけ、変えさせるには、「市民の一人一人が自覚して世論形成に参加することが、不可欠の条件をなす」と考えていた⁴⁴。既存の組織の組織的行動の必要を否定するわけではないが、「既成の組織が『ベトナム侵略反対』のため不十分な活動しかできないのなら、いくら微力でも新しい市民の組織がそれを補わねばならない」し、「侵略政策の一つ一つに敏感に、迅速に、対応できる運動」が市民によって担われることがどうしても必要だと倉田や山田は訴えた⁴⁵。

九大の既存組織による学生運動に、ベトナム反戦の活発な動きがみられなかったというのは事実である。すでに述べたように、65年10月には九大の数学教官を中心

⁴¹ 『朝日グラフ』(1967年12月8日号)、66頁。

⁴² 鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』(河出書房、1967年)、219頁。

⁴³ 倉田令二郎・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』(1966年8月号)、101頁。

⁴⁴ 鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』(河出書房、1967年)、219-20頁。

⁴⁵ 倉田令二郎・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』(1966年8月号)、101頁。

にベトナム反戦「十の日デモの会」が発足し、それに触発されるかたちでその後医学部の一部の学生が「ベトナム戦争反対に立ち上がる会」を作って活動に取り組みはじめていた。67年4月にジョンソン駐日大使が来福して九大学長との会談が予定された際には、九大学友会は「ジョンソン大使来学阻止」の方針をとった。最終的には、学内での会見は中止となったものの、民青系を中心とする中央執行委員会は学外での会見の阻止まで取り組むつもりはなかった。4月20日の学外会見当日の阻止行動を「十の日デモの会」、「立ち上がる会」、「来校阻止委員会」の三者は提起したが、学友会中央執行委員会はこれをむしろ少数者による挑発行為としてとらえていたようである⁴⁶。東京版の『朝日新聞』では、九大学友会の60名が宿泊先ホテルに押しかけて抗議し、一人が逮捕されたと報道されているが⁴⁷、これはおそらく社青同系の医学部代議員を中心に行なわれたものであったのだろう。九大における学生の反戦運動の顕在化は、米原子力潜水艦寄港に反対して激しく闘われた68年1月の佐世保闘争以降となる。

12. 安保以来最大の九大学生デモ——樽神輿と仮装行列

興味深いのは、1965年2月のベトナム北爆から68年1月の佐世保闘争までの約3年のあいだ、九大学生が大衆的な規模で最もこだわった問題が、ベトナム反戦でも日韓条約闘争でもなく、67年初夏の教養部田島寮の寮祭の樽神輿コースおよび九大学生祭の仮装行列コースの変更問題をめぐったものだったという点である。教養部学生を中心に、多いときには2,000人にのぼる学生が結集して、繰り返し抗議の街頭デモを県警にかけ、安保以来の大動員として地元メディアの注目を華々しく浴びた運動だった。

6月に行なわれていた樽神輿と九大祭では例年、学生たちが市内の目抜き通りを練り歩いていた。とくに仮装行列は、学生には平和と民主主義を市民に訴えるデモの場でもあり、市民からも年中行事として親しまれていたという⁴⁸。ところが、67年、福岡警察署が交通量の増加を理由にこれを認めず、コースの変更を要求し、変更がなければ道路使用許可は出せないとした。学生たちはこれに激しく抵抗し、抗議デモが何度も行なわれたのである。

この抗議運動は、ベトナム反戦運動と直接かかわるものではないが、九大学生がどういう問題に大きな不満と怒りを感じたのか、また当局がどういう態度をとった場合に学生側は激しく反応するのかを示した重要な事例のように思われる。その後の、九大の反戦運動や学生運動の特質の多くが、この事件にすでに垣間見られるように思われるので、やや詳しく経過を追ってみたい。

⁴⁶ 『九州大学新聞』1967年7月10日。

⁴⁷ 『朝日新聞』東京版、1967年4月20日夕刊。九州大学学友会とは、大学院生を含む九州大学学生を正会員とした全学の学生自治組織。代議員総会、中央委員会、中央執行委員会からなり、代議員総会が正会員の意志最高決定機関、中央執行委員会は学生活動の最高執行機関とされた。『九州大学七十五年史 通史』（九州大学、1992年）、277-78頁。

⁴⁸ この事件の概要については、諫山博「九州における集団示威行動の取締りの実態」『法律時報』1967年10月臨時増刊号、105-107頁を参照した。

田島寮祭の樽神輿は従来、冷泉公園―呉服町―中洲―天神―陸運局前―教養部―田島寮(六本松)というコースで行なわれていた。5月1日に第1回目の交渉を福岡署と持ったが、天神の道路は通さないかもしれないと告げられ、その後の数度の交渉の末5月18日、西署管内でのみ樽神輿を行なうという縮小案での実施を余儀なくされている⁴⁹。第11回田島寮祭は6月3・4日に開催され、樽神輿は教養部―大濠公園―西公園―荒戸町―大手門―護国神社―教養部―田島寮という「かなり人通りの少ないコース」を通ったが、市民の評判は良かったという⁵⁰。

一方、大学祭の仮装行列は六本松―赤坂門―電車通り―土居町―冷泉公園という従来のコースで、教養部自治会が5月16日に道路使用許可申請をした。『西日本新聞』では、県警側はコースの変更について話し合いたいので県警に来てほしいと伝え、県警側は19時まで待っていたが、学生たちが到着したのは19時40分で、話し合いは流れたと報道されている⁵¹。しかし、『九州大学新聞』によると、コース変更すれば許可するという話はなく、学生側は「事実上の仮装行列の禁止」と受け取っていた⁵²。そのため、19日午後4時、学友会、九大祭実行委員会、教養部自治会など学生側の代表70人が県警本部を訪れて交通部長に面会を求め、その後約300人の学生が5時すぎにプラカードを掲げて県庁まで抗議デモを行ない、中庭になだれ込み、すわり込む行動に出たのである。警察側は折衝の代表の人数を2名として譲らないまま、交通部長は午後7時過ぎ引き上げて物別れに終わった。その後学生たちは冷泉公園までデモ。学生側は、「九大祭は四、五年前から始め、田島寮祭のタルみこしはことしが十一回目ですけれども市民にすっかりおなじみになっているのに警察が認めないのは納得できない。警察は学生と市民の間を分断しようとしている」、「車がふえたというなら、交通量などはっきりしたデータを見せるべきだ」⁵³などと主張したという。

翌20日には600人を動員して学生たちはふたたび県庁に押しかけた。県庁中庭のデモ許可を取ったにもかかわらず、警察側は県庁の門すべてを閉じて学生たちを一歩も入れさせなかった。九大教養部の学生自治会と九大学友会は、そうした警察側の高姿勢にますます反発、24日には2,000人の参加者とともに県警に3度目の抗議行動を行なった⁵⁴。

学生たちは午後二時から一部の授業を放棄して抗議デモに入り、同三時に福岡県庁前に集結、たちまち、スクラムを組んで正門前に待機していた百人の警官隊と二度にわたってぶつかった。学生たちは県庁前の歩道からはみ出し、電車通りに約五十人にわたってほとんど全員がすわり込んだ。手には「表現の自由と民主主義を守れ」「九大祭を成功させよう」などのプラカードをかかげ「警察の不当弾圧に反対」「仮装行列を認めよ」などのシュプレヒコールを連呼、県警側も「交通がマヒするので、道交法違反の行為になる。早くすわり込みを解い

⁴⁹ 『九州大学新聞』1967年5月25日。

⁵⁰ 『九州大学新聞』1967年6月10日。

⁵¹ 『西日本新聞』1967年5月20日朝刊、5月25日朝刊、6月2日朝刊。

⁵² 『九州大学新聞』1967年5月25日。

⁵³ 『西日本新聞』1967年5月20日朝刊。

⁵⁴ 『九州大学新聞』(1967年5月25日)では、24日に県庁前に座り込んだ学生は1,700名と報じられている。

て正常なデモに戻れ」と再三マイクで呼びかけるなど不穏な空気。学生側は「だれがこういう事態を招いたのか。われわれをなかに入れば問題は解決する」と反論したまま動かなかった⁵⁵。

午後3時40分、田中交通部長が学生抗議団10人と話合うことになったが、抗議団全員の名前を明かせと警察が求めたことから紛糾。学生側は電車通りにすわり込んだ学生を歩道に上げることを了承して話し合いに入ったが、再度物別れに終わった。すわり込んでいた学生たちは抗議団の報告を受けてさらに態度を硬化、午後7時に県庁正門を閉めようとした機動隊と激突、学生が一人逮捕された。学生約1,000名が逮捕された学生の釈放を求めて福岡署や周辺でデモやすわりこみを続け、逮捕学生が釈放された午前1時半になって解散。新聞では、安保以来の大動員として報道されるにいった。

九大当局は、学生祭は学生に任しているとして静観、警察側は大学当局のあつせんがないという不満をもらしていた。しかし、学生にはもちろん、市民や、百瀬九大学生部長を含む九大教官の中にも、警察の不寛容で高飛車な対応には深い不信感がみられた——交通マヒを理由にして集会や表現の自由が制限されていくのではない、1970年の安保改定を前に警察が学生運動の抑え込みを企図しているのではない、自衛隊のパレードや「どんたく」は目抜き通りを通して学生の神輿や行列を通さないのはなぜか、等々⁵⁶。

結局、学生部長ら教養部学生委員会の教官があつせんに乗り出し、26日午後に学友会および教養部自治会の代表30人と県警側がテーブルに着いた。その場で県警はコース変更の代案を出したが、学生側は学生の総意を聞く必要があると留保した。そして、学生側代表は、午後5時ごろ県庁に到着してデモを終え中庭にすわり込んでいた、教養部1,300人、本学50人の学生たちに警察提案を報告したのである。しかし、百数十人の「活動グループ」の学生がこれを不満として、県警幹部との団体交渉および学生自治会執行部の不信任を要求。自治会は代議員会議やクラス討論などにはかった結果、結局県警代案を拒否することとなり、学生側は抗議デモ再開を決めた⁵⁷。

最終的には、仮装行列を数時間後に控えた当日の昼休みに開かれた教養部臨時代議員会で、民青系の自治会執行委員会が提出した最終案(六本松—赤坂門—検察庁前一五十メートル道路—天神—渡辺通四丁目—国体道路—冷泉公園)が少数差で可決され、県警もこれを了承した。これは、赤坂門から土居町までの電車通りは絶対に許可しないという県警側の前提を認めたものであった。また県警側は許可するにあたり、当日に九大関係のデモは行なわないという約束をさせたうえで学生案を許可した⁵⁸。この条件提示には、警察側が仮装行列の機会が反戦デモなどの学生による示威行動の場に化すのではないかという懸念が存在していたことが

⁵⁵ 『西日本新聞』1967年5月25日朝刊。

⁵⁶ 同上。

⁵⁷ 『西日本新聞』1967年5月26日夕刊、5月27日朝刊、6月2日朝刊。県警側は、過去5年間で福岡県下の車台数は66パーセントも増え、問題となっていた赤坂門—土肥長間電車道をはじめ、学生の申請コースは交通量県下一であり、そこを通るのは無理などと説明していた(『西日本新聞』1967年6月3日夕刊)。

⁵⁸ 『九州大学新聞』1967年6月10日。

窺われるといえよう。交通量の増大だけが規制に乗り出した理由でなかったことは、明らかである。

警察側の許可が出てまもなく、九大の応援旗を先頭に立てた行列が教養部を出発。赤坂門から天神交差点をへて冷泉公園まで、学生約500人が「ベトナム和平」「交通戦争」「受験地獄」などをテーマに仮装して繰り出した⁵⁹。

65年に法学部に入学して自治会活動に参加していた村岡五十次は、以上述べてきた学生デモを先導した一人だった。村岡は次のように回想している。

教養部に学生寮があるんですけど、学生寮の毎年の行事で樽神輿というのを担いでずっと福岡市内、繁華街を練り歩くというのがあって。それをですね、交通量が増えたんで、もう今年は通らせないという話にですね、あれはね、67年だったかな、67年のちょうど夏頃そういうのがあって。で、おかしいじゃないか、という話になって。そいつを通らせろ、っていう話になって、これがもう大盛り上がりになり盛りがあってですね。街頭デモをどんどんやったことがあるんですよ。……なんで警察がそういう規制をするかという話になって、とにかくそういう規制がおかしいということですね、非常になんか盛り上がったですね(笑)。今考えるとおもしろいんですけど。……寮で問題になって自治会全体でそれはおかしいじゃないかって話になって、かなりその自然発生的なデモになって。そのデモを、チランをまいたりして組織をするというのをやりましたね。それに、いわゆる民青系の人たちは乗らなかったけど、それ以外のやつは全部乗ってきたからですね、対警察ということで。……1,000人ぐらい、1,000人もいかなかったかな。4～500のデモにはなりましたもんね。結構それを楽しんでやってた……⁶⁰。

村岡の発言からもわかるのは、自分たちの従来認められてきた慣習に対して当局が正当な理由なく、あるいは理由の十分な説明なく規制してくること、つまり、警察の権威主義的介入への鋭敏な反感が学生たちに広く共有されていたということである。警察当局は当初、規制する理由を逐一学生に説明する必要を感じていなかったし、学生と対等な立場で交渉をしなければならない理由などないという立場だったのだろう。しかし、学生側が、不利益変更である以上、警察当局が合理的な説明を尽くし、学生側の合意を取る義務と責務があると考えたのはもっともなことだった。学生たちの反発は、警察当局側のものごとの進めるときの横柄で権威主義的な姿勢、態度に最も先鋭に向けられていたように思われる。

この一見ベトナム反戦運動とは無関係な学生の抗議行動は、その後68年冒頭から急速に高まりをみせる九大の反戦運動を理解するうえで重要であるように思われる。というのは、上意下達的なものごとの決定の仕方に学生が感覚的あるいは反射的な抗議の意思表示をし、またそれが大学および学生生活の自立性・自治性をめぐって展開されたことは、68年6月の九大キャンパスへの米軍ジェット機墜落以降激化した九大学生によるベトナム反戦運動にみられた抗議形態にもあてはまる特徴のように思われるからである。

13. 十の日デモの広がりとその評価

⁵⁹ 『西日本新聞』1967年6月8日朝刊。

⁶⁰ 村岡五十次オーラル・ヒストリー、2008年9月27日。

13-1. 福岡市民の十の日デモ評価

以上みてきたように、発足して2年余りのうちに、活動の幅を広げ、参加者の多様性も増していった十の日デモではあった。しかし、1967年末時点でもなお、「地元ですら、あまり知られていない」⁶¹のが十の日デモであった。67年12月5日付の『毎日新聞』(西部版)の十の日デモ取材記事は「デモに対する市民の行動反応はなかなか現れない」とし、距離を置く市民の声にその理由をみようとしている。天神1丁目交差点で取材された仕事帰りの二人連れの会社員は、十の日デモに対して次のような感想を持っていた。

「よくやってるなあ——と思う。いま心のどこかで、一緒に歩いてみようかな、とふと考えたんだが、どうもふんざりがつかなくて」(三十六歳)
「ウン、羽田[羽田闘争]みたいなのは困るネ。でも、やっぱり何かの形で、戦争反対の気持ちは表すべきかな。ボク？ 弱っちゃったな」(二十六歳)

繁華街東中洲のハイティーンの女性三人連れはもっと冷ややかだ。

「大変ね」と二人「だって効果があるかしら」ともう一人が応じる。「そうね、戦争反対には変わらないんだけどなあ。どう運動したって、私たちが戦争をやめさせる力には、なりっこないでしょう？」⁶²

記事はこう論評している。

おそらく大多数の市民の気持ちも大同小異だろう。いや、デモの人々の大多数も、さして飛躍した考え方ではないのである。……ある人はヒューマニズムの立場から、ある人は過去の戦争の体験から「とにかく、この戦争をやめさせ、日本が加担しないように」という人が大半だ。ただ街頭の人々と決定的に違うのは、その意見を行動に出すか出さないかという決意の問題であるかもしれない⁶³。

高校教師を定年退職した62歳の老人のように、「ベトナム戦争反対の気持ちのやり場がなくてイライラしていたとき、たまたま新聞でこのデモを知った」ので参加してきた人もいた⁶⁴。67年12月30日、初めて十の日デモに参加したという老婦人とその娘は「やっとふんざりがついた」と記者に語った。ただし、「それにしても、街の人たちが無関心なのは驚きます」と続けている⁶⁵。いずれにせよ、このような市民たちに意思表示の場を提供することのできたのが、欠くことなくひと月に三度定期的に行なわれた十の日デモだったといえる。

13-2. 組織による運動と市民個人による運動

⁶¹ 『毎日新聞』西部版朝刊、1967年12月5日。

⁶² 同上。

⁶³ 同上。

⁶⁴ 同上。

⁶⁵ 『毎日新聞』西部版朝刊、1967年12月6日。

個人が集まって意思表示する運動では成果を得られない、大組織の運動でなければ意味がないという批判はずっと根強くあった。たとえば九大学友会のある執行委員は、1967年12月、ベ平連型の反戦運動に対しては次のように冷淡だった。

全く無意味だとはいわない。しかし“ベトナムに平和を”といったバラ色の反戦運動を志向していたのでは、第一“敵”をあいまいにする。運動とは、サラリーマン、労働者、学生たちの個々の生活要求をもとにした戦いだから、組織をもたないやり方はナンセンスですよ⁶⁶。

組織的運動でないかぎり有効ではないという批判については、長老格の金原誠が、十の日デモ発足しておよそ2年後に書かれた文章で次のようにコメントしている。

さてこの会についての批判はもちろんありますが、もっとも大きい批判は、組織によらない無言のデモなどナンセンスだということです。組織によらなければ一応大きな力とはなり得ないという程度のことは参加者の大多数は熟知しています。だからそういうデモに反対しているのでは毛頭ありません。しかし組織を持たない人、また無言のおとなしいデモなら参加できるという人達のアメリカの政策に対する憤りに行動の場を提供し、そういう人も結集して行くことも非常に意味を持つと私は思うのです。⁶⁷

発足以来2年以上一度も欠かさずデモに参加し、「ガンコジジイ」と学生から呼ばれていた59歳の服部泰九大教授(教養部・数学)は、なんの気負いもなく、次のように十の日デモを位置付けていた。

私は(ほとんどの人[十の日デモの参加者の]が“私たちは”とは表現しない)別に声を枯らして呼びかけようとは思わない。戦争反対の気持ちを積極的に表しているだけなんだ。私には、いまのところ、これが最善の方法と思うからね。デモをみた人が、自発的に、自分の可能な程度で参加すれば、それでいい⁶⁸。

一方、十の日デモの会の中心的人物であり、社会主義協会系の社会科学系九大教官だった島崎譲は、組織行動による平和運動の問題点について次のように論じて、個人主体の平和運動の重要性を、おそらくやや過剰にはあったが、積極的に評価しようとしていた。

⁶⁶ 同上。おそらくは民青系の立場の執行委員である。

⁶⁷ 金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」『若い広場』、1968年5月号、50頁。この原稿の初稿執筆時期は67年12月。

⁶⁸ 『毎日新聞』西部版朝刊、1967年12月6日。記事では名前が服部「泰」と記されているが、服部勇の年少の同僚数学者である服部泰は1914年生まれであり、1967年当時59歳ではない。また、服部泰は1966年9月から行なわれた数学者のベトナム反戦署名にも署名していない(『数学者によるベトナム戦争反対の国際署名運動』1966年12月、吉川勇一史料「ベ平連発行文書」所収)。「泰」は誤記・誤報であり、初回から欠かさず参加していたのは「勇」であったと思われる。

わが国の労働運動とか、平和運動をふりかえってみると、組織行動の場合、一人々々の組合員はいつも機関決定によって動いてきたんじゃないかな。そして所属する母体の決定がないかぎり、個人としては参加しないことが身についてしまった。ある意味で、受け身の行動になれすぎて“孤立した”個人として、主張し、発言し行動するということに欠けていたのだ⁶⁹。

たしかに、『毎日新聞』の取材に対して答えた25歳のOLもこう語っていた。

職場でなら、こうしたデモに参加してきたのですが、街の中で、私一人だと、加わることに、どうもひっかかりがあるんです。

ベトナム反戦デモに個人として参加するということは、すべての問題を自分で引き受けなければならない。個人として責任を引き受けた上で、自らが意思表示しなければならない。組織動員という縛りはないから、どこかで自分で参加するという意思決定、決心をしなければならない。そして、自分がベトナム戦争の直接の当事者とはいえない問題である以上、そうした決心への過程ではある種の躊躇や判断の迷いが常に待ち受けていることが多いだろう。その意味で、デモへの参加者には、どれほど小さくみえようとも、あるいは一回限りで持続性に欠ける場合があるにしても、いったんはなんらかの「政治化」を自分自身の内部において経験することになる。ここではそれをとりあえず、「等身大の政治化」と呼んでおきたい⁷⁰。

金原誠教授は、市民による定例デモの意義について、あくまで前向きに次のように述べている。

現状では全くおとなしいデモなど現政府に対しては蛙の面に水でありましょう。しかしこれもこの種の運動が全国に野火の如く広がったら、一つの圧力になると私は信じます。なぜならその場合でも蛙の面に水の有様であるとしたら暴力を含む烈しい力による抵抗運動を批難する理由が政府にもマスコミにも全く無くなるからです。私も含めて十の日デモに参加している相当数の人はこれだけで十分だとは決して考えてはいません。自分の考えに合い、自分に可能な反戦運動なら、できる限り、何でもやろうと考えています。現に私は先の数学者の運動の他にもその後でできた少し異質のベトナムのための反戦運動にも加わっています。けれども、十の日デモなら、おとなしいデモなら参加できるという人達のおとなしい憤りを結集していくことはいま述べたように非常に意味を持つと私は思うのです。⁷¹

「野火の如く広がったら」という金原の願いはまったくの夢に終わりはしなかった。1967年7月1日から毎月2回、東京三鷹の「ベトナム反戦チョウチン・デモの会」が、十

⁶⁹ 『毎日新聞』西部版朝刊、1967年12月6日。

⁷⁰ なお、このことは、ベトナム反戦運動への取り組みや参加が、職場という組織においてより容易であったということではない。その点は、本誌11号および12号でもみてきたとおりである。

⁷¹ 金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」（1967年執筆），金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』（1972年），42頁。

の日デモの会にならって、定例デモを始めた⁷²。北九州でも同様に市民の反戦デモが始まっていた⁷³。積極的に反戦運動の拡大に取り組んだりはいしないが、「おとなしい憤りを結集していく」持続的な市民運動。十の日デモはその意義を信じて続けられ、注目もされたのである。

14. まとめにかえて

最後に、本論文全体（3部構成全体）で明らかにしてきた諸論点を、福岡の十の日デモの会の活動に即したものに限ってあらためて整理しておく。本誌11号掲載の第1部に当たる論考でまず指摘したのは、定例的な十の日デモが始まる以前、既成組織に頼らないベトナム戦争反対の声を福岡市で最初に挙げたのは九州大学の教官たち、とりわけ戦争を経験した古参のリベラルな知識人であったことである。しかし、こうしたアメリカ合衆国によるベトナム戦争介入反対の意思表示は、福岡以外の大学や地域においてすでに先行例がみられたものでもあり、福岡が初めてでもなければ特異なものというわけでもなかった。

本誌12号掲載の第2部に当たる論考においては、最初に67年末までの福岡での既成組織（政党や労働組合）によるベトナム反戦運動の動向を追い、福岡における闘争が、九州北部および沖縄がベトナム戦争の米軍戦略基地地帯となることへの反対というかたちで取り組まれていた点を明らかにした。ナイキ・ミサイルの配備、射爆場の存在、博多港での弾薬陸揚げ、小倉の山田弾薬庫の強化、そしてなによりも板付基地の活用強化に対する抗議運動が、福岡の既成組織が取り組んだベトナム反戦運動であった。そして、既成組織による反戦運動の中でも、既成組織外の市民や、既成組織に所属しながら自主性のある活動を求める若者世代の意向に応えようとする運動形態の模索が試みられていることを明らかにし、市民的な反戦運動への需要が一定程度醸成されていたことを指摘した。組織運動と非組織的運動は、必ずしも排他的な関係にあったのではないし、組織運動が市民運動より重要でないわけでもなかった。

次に、福岡の市民によるベトナム反戦運動の動向を検討した。既成組織による、あるいは既成組織を基盤にした反戦運動とは異なる特徴を持つ「市民」中心のベトナム反戦運動が1960年代半ばの福岡に登場したが、その「市民」は既成組織に所属しないままで、あるいは所属する既成組織を持ちながらも組織の運動とは別に、一個人として自主的に参加することができるベトナム反戦運動の実践に意義を認めて活動を展開しようとした。福岡の場合、そうした運動の場づくりに尽力したのは九州大学の知識人であった。とりわけ重要だったのが九大の数学者と、彼らが属していた学会である日本数学会の動向である。そうした数学者の動きの中で、1965年10月に「十の日デモの会」は発足する。その福岡「十の日デモの会」の発足の経緯と担い手については本誌12号掲載の論考で詳しく論じたが、定例デモ発足の直接の契機は、数学者の国際ネットワークを通じた合衆国での反戦運動との連帯行動にあった。マス・メディアを通して

⁷² 『アサヒグラフ』(1967年12月8日号)、66頁。「ベトナム反戦チョウチン・デモの会」は、毎月1日と15日、「夜七時に井之頭公園の野外音楽堂に集まって、万灯を先頭に、手に手にちょうちんを持って三鷹駅まで四キロ行進」するものだった。

⁷³ 同上。

インパクトのある映像とともに伝えられたベトナム戦争の惨状が戦争反対運動の意識の基層を形成していたことに疑いはないが、ベトナムの市民や民衆、あるいは政治運動や社会運動との具体的な連携があつて始まったわけではなかった。そして、国内的には「十の日デモの会」とその運動は、東京や合衆国での市民による反戦運動を意識してはいたが、あくまで福岡というローカルな場で独自に始動した活動であつた。

しかし、1966年の夏になると、東京の「ベ平連」の働き掛けを契機にして、地域個別にほそぼそと展開されていた地域ベトナム反戦運動は、いわゆる「ベ平連運動」というかたちで結節点を見出すようになる。参加者が九州大学の教員と学生に限られ、福岡市というローカルな地域空間の中で展開されていた福岡の「十の日デモの会」も、1966年6月からは、東京のベトナム反戦市民運動（ベ平連）との連携を始めている。本号掲載の本論稿で注目したのは、福岡における十の日デモが、そうした全国的なベトナム反戦のための連携ネットワーク形成に、60年安保闘争を含みベラルな戦後知識人の運動において形成されていた人的ネットワークを介して接続、参与していった点である。

同時期、並行して、十の日デモの参加者にも変化が見られるようになった点も明らかにした。労働組合に組織された若い世代の労働者たち、独自の反戦グループを作った九州大学医学部の学生たちが新たな参加主体となって加わった。個人として十の日デモに主体的に参加するようになった九大内外の学生たちについても、オーラル・ヒストリーのインタビューによる事例として検討した。このように、十の日デモの会は、時間の経過とともに、新旧の複数の運動のサブ・ネットワークとの間に、定例デモや講演会というイベントをとおして結び目を作っていた。別言すれば、十の日デモの会は福岡のローカルな運動ではあつたが、時間的にも空間的にも大きく異なるアイデンティティを持つ複数のサブ・ネットワークからなる現象でもあつた。

しかし、参加者を広げ、他地域の反戦運動との連携も始まりはしたもの、1967年までの間「十の日デモ」への参加者は概して少数であつた。そして、本論考では、十の日デモに対する当時の福岡市民の評価と態度を確認し、また、デモ参加者たちがどのように自らのデモを位置づけていたのかについても確認した。十の日デモの精神的な支柱でもあつた金原誠の言葉を繰り返すことになるが、小規模だが「おとなしい憤りを結集していく」ことを共通理解とした持続的な市民運動が、1965年～67年までの初期「十の日デモ」であつたということになろう。

全体として、十の日デモ参加者が共通して有していたと思われる開放的かつ遊び心のある気質の重要性に着目し、それをできる限り示そうとした。というのも、それが運動の気分とでもいうものの基底を形作り、セクトも含む多様で幅広い市民が出入りを繰り返すことのできる場を形成したように思われるからである。十の日デモの運動も含めて福岡におけるベトナム反戦市民運動のあり方は、いくつかの重要な出来事の経緯を経て変貌を遂げていくことになるが、その基底には設立当初からの開放的な文化が持続していた。その文化は、戦前戦中派世代の数学者が持っていた戦争責任の自覚、戦後世代の数学者の日本数学界民主化への熱情、その両者がともに、ベトナム反戦を公然と訴えていたシュワルツやスメイルといった世界的数学者との交流に後押しされて、とりわけ

福岡で集団的に強く発火し、やがて多様な人びとを惹きつけていくことになったのである。

謝辞

本文の執筆にあたり、執筆者のインタビューに応じてくださった方々、また論文への掲載をご承諾いただいたみなさんに感謝申し上げます。

A Study on Anti-Vietnam War Movements in Japan 1965–1967, with special reference to Fukuoka City (3)

Hideo ICHIHASHI

Amongst many anti-Vietnam War movements in Japan, one of the longest sustained is that of Fukuoka city in Kyusyu. The focus of the movement was *Jū-no-hi-demo*’ or *Tō-no-hi-demo*, citizen’s protest walks in the city centre, organized every 10th day of the month from 1965 to 1973.

However, its characteristics and membership changed substantially in the first half of 1968. The author of this article thus named the first three years before 1968 as *Tō-no-hi-demo no Jidai* (‘the years of the tenth day protest walk’), and wrote a historical essay focusing on the period. This examined the birth and development of the Fukuoka citizens’ protest movement against the Vietnam War as well as placing it in the much wider national context of the anti-Vietnam War movement across Japan. This article is the third, the final part of that essay.

As discussed in the previous parts of the essay, *Tō-no-hi-demo no kai* (Association for the Tenth Day Protest Walk) started with several mathematicians of Kyusyu University as its main membership. But by June 1966, *Tō-no-hi-demo no kai* began to collaborate with an anti-Vietnam War movement in Tokyo. This, so-called ‘Tokyo Beheiren’, proposed a nation-wide lecture tour on war on Vietnam, and *Tō-no-hi-demo no kai* accepted that it would host a public lecture in Fukuoka. This article firstly examines the process in which *Tō-no-hi-demo no kai* began to make connections with other anti-Vietnam war movements outside Fukuoka.

Along the gradual formation of the anti-Vietnam war network with groups of other regions, *To-no-hi-demo* began to attract participants of more varied backgrounds. Trade union members of younger generations, an anti-war group of medical students, and students from universities other than Kyusyu University joined the *demo*. The second

topic the article examines is the expansion of participants in *Tō-no-hi-demo*.

Thirdly, the article looked at the Kyusyu university student's protest actions against the local police who tried to regulate the student's festival procession on the main city road. The procession had been running annually for many years, and the attempts from the police to limit it gave rise to the massive direct protest action from the students. Although this was not an anti-war protest in any sense, it seems to have revealed the ethos and attitudes of the students at the time.

Lastly, the article examined the reaction to *Tō-no-hi-demo* among the general public in Fukuoka, as well as evaluates the self-awareness of the participants.

Key words: anti-war movements, Vietnam War, Fukuoka City, *Tō-no-hi-demo*